第 13 回目（1994 年 1 月 15 日放送）

【いろはがるた】

なし

【話の内容】

大久保は 1924 年にハワイへ来てから、新聞記者をしていた。それから戦争までの間の真面目男といえば、ハワイ報知主筆であった寺崎定助（クリスチャン）であった。ハワイ報知社長の牧野金三郎でも「さん付け」で呼んだほどの男であった。日布時事では豊平走川（とよひらそうせん）、川添樫風（かわぞえけんぷう）といった記者たちが真面目男として挙げられる。「ちゃんの三人男」と呼ばれる三人衆もいた。一人目はハワイ新報で手伝っていた小林虎男（とらちゃん）。二人目はヤマグチ・ノブオ（のぶちゃん）。三人目は吉田信次（ぶっちゃん [1]）であった。相賀安太郎（日布時事主筆）、牧野金三郎（ハワイ報知社長）はスケールが違った。

1953 年にハワイ支店を開いた日本航空は「飛べば飛ぶほど赤字の日航」と言われた。1952 年に野原克也（4 代目の支店長）が日本からやってきて、支店開設のために働いた。たった 8 人の従業者からはじまった。当時はマーチャント通り [2]にあったディリングハムビルの中にオフィスがあった。初代所長はハタ・ヤスイチであった。2 代目はクニトモ・ノブミツ、3 代目は沖縄支店長だったオオシマ・セイイチ。

お客さん係が前田さん、外人の係が池田夫人だったが、日本語学校の教師なども務めたマエダの後に客室担当だったのは長谷川鶴蔵だった（4 代の支店長に仕える。）。「つるさん」と呼ばれ、みんなに愛された。

今は（日航）飛行機で日本とハワイの移動も楽になったが、「いく千里隔てて菊の香りかな」と思う放送だった。

【曲】

「ふるさと」

【サブジェクトタグ】

ハワイ報知　ハワイ新報　日布時事　日本航空　コミュニティ　有力者

---

[1] ぼっちゃんの間違いか。

[2] ダウンタウンのサウスキング通りとアラモアナ大通りの間に挟まれ、ヌウアヌ通りとフォート通りを結ぶ短い通り。